



写真2 菅生神社の初山獅子舞

二、民衆の自覚が肝要である

神社やお寺へ参拝に行き、祭祀活動に参加するのは民衆が神様を心から信仰しているためである。例えば、日本人は生後一か月や七五三の良い日にわが子を連れて神社やお寺に参拝し、神様のご加護が受けられるよう祈る。さらに、多くの新郎新婦は結婚する際、神官に導かれる伝統的な神前式を選ぶとも聞く。様々な事例から、神様に対する信仰は民衆の心に根差し、自発的な行為であることを示している。

三、景観の保護を重視している

神社の周囲にある数多くの古い建物では、かつて神社の一部の活動が行われていたようだが、それらは商店や喫茶店に改築された今もなお、当時の姿そのままに保存されている。中国では周庄のような古い町で、多くの古い建物が撤去され新しい建物が造られている。日本の景観に対する保護意識は我々も学ぶべきであろう。

四、地域活性化を提唱している

2016年10月1日から3日まで、日本民俗学会第68回年会在千葉商科大学で行われた。大会は「民

俗学と〈地域活性化〉」をテーマとして、国内や海外の研究者を集め、地域活性化をどのように民俗保護分野に活用するかを検討した。大会では熊本大学の山下裕作教授、慶応義塾大学の鈴木正宗教授、尚美学園大学の櫻井準也教授らが研究報告をした。元々経済分野で使われている地域活性化という方法を、民俗保護分野に活用することが、日本民俗保護における新しい道を作り出したといえる。

日本の現代社会における伝統生活様式の伝承の状況をひとつお理解したところで、また新しい疑問が出てきた。例えば、これらの伝統生活様式が現代社会で伝承し続ける原因は何か、伝承の形と様式にはどのような変化があるのか、急速に都市化している日本では今後の

伝承はどのように続くのか、といった疑問である。以上の問題点はこれからの課題としてさらなる研究が必要となる。



写真3 日本民家園を訪問

現代日本のミュージアム建築の空間言語

ジアダ リッチ
(フランス国立高等研究院)



建築家、展示デザイナー、博物館学者として活動する専門家のプリズムを通して現代ミュージアムにおける空間概念を研究する私は、日本の伝統的な美学と空間コード(基準)にも通じる特徴の一つとして「現代日本のミュージアム建築の空間言語—アートミュージアムにおける展示デザインと作品陳列のコンセプトおよび特徴」というテーマに取り組んだ。日本の現代ミュージアムに対するこうした解釈に至るまでに、主要な文書・非文字資料を研究し、最新のアートミュージアムを訪問・評価し、さらにインタビューによって関連する情報や意

見を集めた。アートミュージアムを解明するために非文字文化として建築空間を活用する方法により、ミュージアムと展示デザインについて概念的ビジョンから感じ方に至るまで考察し、また美術作品・オブジェの陳列を自然や今日の都市景観と関連付けながら分析した。現代のミュージアム建築および展示方法は日本の伝統に深く根差しているというのが、この研究の主たる論点である。

近代以前の伝統については、主要な資料として浮世絵



(はかない現世「浮き世」の絵、人気のある人物や日常生活を描いた19～20世紀の木版画)と名所図会(日本の名所・景勝地を解説する絵図入りの案内書)を参考にした。さらに研究では、宗教画または宗教色のない絵画鑑賞の起こりといえる絵解き(絵画の内容解説)、寺院や個人宅の床の間(作り付けの壁がん)の飾りに加え、公開展示の原型である開帳(秘仏を見せること)、絵馬堂(奉納された絵馬を掲げておく建物)なども考察した。

日本の展覧会やミュージアムの原点としては、奈良の東大寺の宝庫、正倉院が8世紀という古くから聖武天皇と光明皇后の遺愛品を収蔵し始め、それが明治時代に日本初のミュージアムにおいて中心的なコレクションとなった。さらに、19世紀の西洋のミュージアムをモデルとして初めて設計された明治時代のミュージアムにおいて日本の現代ミュージアムの原点と特徴を探求し、次いで研究では日本の最新のアートミュージアムをいくつか取り上げ、ミュージアム建築と作品・オブジェ陳列の最近の手法を中心に論じている。

さらには日本のミュージアム空間と日本の伝統的建築コードとの関係性を見出すために、研究では19世紀末から20世紀半ばにかけて日欧混合の建築家チームによって建設された主要なアートミュージアムを分析している。具体的には、ジョサイア・コンドルが片山東熊らと設計した上野公園の東京国立博物館の初めの本館(1881年、損壊し現存せず)とル・コルビュジエ、前川國男、坂倉準三、吉阪隆正が建設した国立西洋美術館(1959年)である。最後にこの研究では、日本の現代の建築家(阿部仁史、安藤忠雄、隈研吾、イオ・ミン・ペイ、SANAA[妹島、西沢2人のユニット]、妹島和世、西沢立衛、藤森照信、谷口吉生)により1990年～2015年の間に建設された日本の現代アートミュージアムのいくつかに焦点を当てている。

文書および非文字資料からの情報を補うために、美術館・博物館長、学芸員、文化機関代表、建築家、展示デザイナー、制作会社といった日本のミュージアム専門家との打ち合わせやインタビューを実施し、今後の研究のために最新のミュージアムに関する資料を入手するだけでなく、生の意見や利用者体験をも収集した。

パリの東アジア文明研究センター(CRCAO)と横浜の神奈川大学非文字資料研究センターとの短期学術交流プログラムによって2016年10月に招聘研究員として日本に滞在する機会に恵まれ、横浜と東京を中心に図書館での研究や資料収集を実施するだけでなく、ミュージアム訪問・評価、打ち合わせ、インタビューのために出張することができた。非文字資料研究センターからの支援は滞在期間のあらゆる面で不可欠であり、特に関連機関や関係者との接触を得るうえで重要であった。また、以前からの研究を完成させ、日本のミュージアムを総合



写真1 豊島美術館



写真2 秋野不矩美術館



写真3 十和田市現代美術館

的に把握するために、青森、浜松、鎌倉、倉敷、京都、豊島、東京、十和田、横浜など日本各地のアートミュージアムと常設・企画・特別展示の視察・評価も実施した。

ジアダ・リッチ
建築家、展示デザイナー、博物館学者
2017年1月10日、パリ